

試される四期目の高橋道政

貴志 雅之

四月に行われた統一地方選で、道内最大の焦点となった知事選は、高橋はるみ知事が新人のフリーキャスター佐藤のりゆき氏との一騎打ちを制して、道知事として初の四選を果たした。

道民が三期一二年の高橋道政を一定程度評価し、従来路線の継続を選択した格好だ。そこからは変化よりも安定を求めた道民の現実志向がうかがえるのではなからうか。

ただ、高橋知事にとつては、再選、三選の時よりも厳しい戦いであったことは明らかだ。それは佐藤氏が単独の相手候補としては初めて一〇〇万票以上を獲得したことからも容易に推測できる。知名度があり、実質的な野党共闘が成立した佐藤氏が相手だっただけに、告示前から高橋知事の危機感は強く、強力な選挙態勢の構築に力を注がねばならなかった。それにもかかわらず、多くの批判票が出た。

こうした結果から見ると、四期目に入った高橋知事がこれまでとは異なった道政運営に気を配らざるを得なくなる可能性は大いにあるだろう。

向いた方向は同じだった

選挙結果は、高橋知事が一四九万六九一五票を獲得したのに対し、佐藤氏は一一四万六五七三票

だった。投票率は59・62%と過去二番目に低かった前回(59・46%)とほとんど変わらなかった。今回の選挙の争点には、人口減少対策や北海道の浮揚策、医療や介護といった高齢化社会への対応策に加え、北海道電力泊原発(後志管内泊村)再稼働の是非が挙がっていた。

北海道はすでに本格的な人口減少、高齢化を迎え、経済や医療、福祉などさまざまな分野で歪みが見え始めている。そんな実情に疲弊し、対策にもがいている地域は多い。道民の暮らしを守り、北海道を浮上させることが本当にできるのか。そんな漠然とした将来への不安が北海道を覆っている。

高橋知事はこれまでの三期一二年でその答えを出し切れなかったと言っている。だからこそ、具体的な北海道の未来像を示し、議論してほしい、というのが今回の知事選に道民が望んだことだったのではなからうか。

しかし、結果は一騎打ちだったにもかかわらず、投票率は前回とほとんど同じだった。盛り上がりに欠けたというのが実態だった。

両候補が目に向けたのは、人口減少をはじめ直面する深刻な問題を克服できる自立した北海道を、いかにして作り上げることだった。

それは知事の道産食品の輸出額を現在の二倍の一千億円に増やすといった公約であり、佐藤氏の全一七九市町村に会社などをつくる「一村一社構想」に象徴される。

だが両者が訴えた内容に大きな差異を感じられなかった。だから、有権者の関心は広がりや欠けたりではないか。

北海道の活性化策での競争は現職が望んだ土俵だった。そこに挑戦者が乗った戦いだつたようにも映った。それゆえに「実際の政治経験がなく、その手腕に未知数な部分が多い新人よりは、手堅い現職の方が安心」というのが、有権者の判断だったと考えられる。

現職が争点として避けたかった泊原発再稼働への姿勢にしても、なかなか違いは見えないという同様な見方をされた点は否めない。

佐藤氏は反対を明確にした。高橋知事ははっきりとした意思の表明は避けつつ、将来的に脱原発社会を目指す主張し、争点をぼかした。戦術が奏功したと言うしかない。

表出したのは現職へのいらだち

高橋知事がこれまで選挙で獲得してきた票数は、再選を果たした二〇〇七年の選挙で約一七四万票、三選目の一一年は約一八五万票まで伸ばしていた。それが今回は一気に三五万票あまり減らした。

一方、相手候補の得票数(複数いる場合はその合計)は、〇七年が約一一七万票、前回は八一万票あまりにまで落ちていた。それが今回の佐藤氏は単独で一〇〇万票越えである。

挑戦者の違いは確かにあるが、道民が現職に

対し不満を募らせていたという実態もまた垣間見える。

ではその不満とは何か？

一二年に及ぶ高橋道政への評価は、選挙直前に北海道新聞社が実施した全道世論調査では、支持派が五割以上と相変わらずの人氣ぶりを示していた。評価の理由は圧倒的に「目立った失策がない」が多かった。ポイントはやはり、ここにあったと見るのが妥当だろう。

「リスクは負わない」という高橋道政の手法には手堅さや安定感を感じさせる一方、現状を打ち破る力強さを見いだせないという面もあったというのが道民の受け止めであったと分析できる。

そんないらだちと反発が、道民の間に蓄積していたとも言える。地下でエネルギーを貯めていたマグマが表出したとの見方もできるだろう。

批判票は今後を左右する

この結果は今後の高橋道政を大きく左右する点とは間違いない。まさしく変化を求める民意の拡大と受け止められるからだ。

高橋知事は選挙後の職員へのあいさつで「批判を真摯に受け止めていかないといけない」と強調し、謙虚な姿勢で今後の道政運営に取り組む考えを示している。

長期政権で憂慮されるのは、組織の硬直化であり、政策に将来を見通した大胆な発想が生まれなくなることだ。相手陣営がこうした指摘を選挙戦を通じて発信し続けたのが、今も知事の耳に残っているのかもしれない。

高橋知事は選挙後の記者会見で、自由闊達な議

論ができる組織づくりを一段と進めていく方針を示した。庁内だけでなく、外部の意見にも耳を傾ける柔軟な姿勢が求められていることも十分に認識している表れだろう。

「道庁は変わった」と外部が受け止めるようになるまでには、高橋知事が今感じているであろう緊張感を、今後ずっと持ち続けられるかにかかっている。その覚悟が試されることになる。

道議会が及ぼす影響

道政には道議会の変化も影響を受けることになる。

とくに与党の自民党だ。五一議席と三二年ぶりに単独過半数となった。これで高橋知事の道政運営は盤石になったと見えるが、そう判断するのは早計だ。

自民党道連には知事選前に高橋知事の四選出馬に難色を示す声があった。道連がまとめた道政検証には厳しい意見があったと言われる。

昨年一月には、柿木克広幹事長が高橋知事らと四選出馬を協議した際に、国への提案力や地域重視の視点に立った大胆な発想の転換などの注文をつけた。

選挙戦で高橋知事が「新しい発想で、大胆に挑戦する」と、ことさら強調した背景には、自民党側のこうした圧力もあったとみられる。知事側からの提案をただ追認するだけでは終わらない雰囲気自民党内にあるのは確かだ。

ただ、選挙前にせつかくまとめた検証を公表もせずに、知事の四選出馬を認めた脆弱さもまた、自民党内にはあるとの指摘がある。選挙を意識し

て、人氣のある知事を利用したいといった内向きな思考のことだ。今後もこうした性質は表に顔を出す可能性は否定できない。自民党もまた今後の動き方次第では、その存在を問われることになるだろう。

一方で、野党はどうか。民主党は党勢回復にまではまだまだ遠い、という現実が突きつけられたのではないだろうか。

副議長や会派会長、会派幹事長など要職にあった現職候補が落選し、改選前にあった三六議席は選挙後に会派離脱者も出て二六議席となり、「深刻な事態」（会派幹部）に陥った。

知事選での候補者選定での迷走もあり、退潮ぶりが浮き彫りになったことで、道政への圧力が低下することは避けられないとの見方が出ている。

また、民主党会派を離脱した議員らがつくった「北海道結志会」は、是々非々の対応を目指すとしており、存在感を発揮できるかが注目される。共産党は三増の四議席となったことで、代表質問の権利を手にした。高橋知事との対決姿勢を強めるのは間違いなく、道政にこれまで以上の緊張感をもたらすかもしれない。

高橋知事は選挙戦に向けて態勢を強固にするために、与党だけでなく、これまで距離を置いていたと言われる道内の首長や道庁OBといった外部の人たちにも支援を要請し、関係修復に動いた。こうしたいわゆる「借り」がどのような形で道政に影響を及ぼすか。高橋知事の動きに注目したい。

へきし まさゆき・北海道新聞論説委員